

Title	Etienne Patte, Notes sur le prehistorique Indochinois, i Resultats des fouilles de la grotte sepulcrale neolithique de Minh Cam (Annam), II Note sur un outil en rhyolite grossierement taille provenant du massif du Bac S nl (Tonkin), Hanoi-Haiphong, 1923
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.4 (1928. 12) ,p.169(635)- 170(636)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281200-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

滿八年を経て、漸く編纂事業の完成を見るに至つたのである。

其の輯叙するところ、概説、本編、史料、附圖合はせて六卷を以て一部とする。第一巻の概説は、全巻の概説に當るものであつて、有益なる圖版を多く挿入し、文字を大にし、記述は力めて平易簡明にし、此の概説をして一の體系をなしたる滋賀縣史として役立たしむるやうに努力されたることは、大いに特筆すべきことである。本編三巻は縣史の主體をなすものであつて、其の内譯は第二巻本編一（上代—中世）、第三巻同二（中世—近世）、第四巻同三（最近世）等である。

要するに本縣史は縣史中の雄なるものであつて、これにより縣の文化發展の經路を明確に知ることが出来る。われらは本縣史の編纂に關與されたる諸氏の努力を深く謝すると同時に、今後本縣史の如き優秀なる縣史が續々刊行されんことを切に希ふものである。（宮島貞亮）

**Etienne Patte, Notes sur le préhistorique
indochinois, I Résultats des fouilles
de la grotte sepulcrale néolithique
de Minh Cam (Annam).**

II Note sur un outil en rhynchoceros
et taillé provenant du massif du Bue S. n. (T
oukhu) (Hanoi-Haiphong, 1923)

今頃こんな古い本を紹介するのは時勢遅れの氣味があるが、日

書 評

本の史界には印度支那のことが割合知られてゐないので不敏を顧みず簡単にこの報告に就て述べてみる。本書は印度支那地質調査局の報告、第十二巻第一冊であり、エテヒアン・バット氏の安南ミンカムの發掘物に關する報告を主としてなる。ミンカムは順北府の遙か西北ドンホイ州に屬しラオナイ河の左岸に位してなる。その右岸に數多の石灰洞あり、その一より石器時代の墳墓が發見されたのである。洞穴の長さは廿五米ばかり、新石器時代を通じて此洞穴の再侵蝕が行はれたと見え、地面より四米餘も高い壁面に考古學的遺物が包藏されてゐる。穴の大部分は墓所であつたらしいが、殆ど全部洗ひ去られて只一つ壁の四所、小さい臺の上に石灰岩の凝結により、約半米四方の遺蹟が取殘された。同所からの發見遺物は破損散亂し、かつその一骨片に人工條痕のある所から此洞穴の藏骨所であり、石器時代民に埋葬前肉片をはぎとる慣習ありしことを知り得る。器物は遺骨ほど散亂せず、殊に貝玉が所々に集合散布し、頸環の残りであることを語つてゐる。その外二個の印度支那特有の有柄石斧、及び普通の磨製石斧二個、及び一個の打製石斧、一種の打製石小刀一個が發見された。貝玉の中、小さい圓盤狀の穴明き玉が四二三、その稍大いものが八個、小さい卷貝の穴あきしもの百七十六、耳形をした貝玉八十六、子安貝の穴あきしもの十などあり、象牙を彫刻した菱形の耳飾り、貝製の耳飾り螺鈿の小板、象牙の小板、小さいピン、石黄、彫刻した齒牙などが獸骨や土器の破片と共に發見された。人骨の中特筆大書すべきは年齢九歳の小兒の頭蓋骨が發見されたことである。しかも面白いのは印度支那フォービンシヤで發見された新石器時代の頭骨が長

頭であるに反し、この頭骨は短頭であり、ネグリトの頭蓋骨と最も類似することである。ネグリトは今日フロリッピン、アンダマン、マレー半島の山地に僅かに餘命を保つ人種であつて、かつては廣大な地域を占領してゐた形跡がある。印度支那の上古にネグリトに類似の人種の住みしことはネグリトの歴史を知る上にまた東方アジアの原始文明を論ずる上に極めて重要な事實である。エテヒアン・パット氏はネグリト族の分布と有柄石斧の分布に相互關係のあることを認めむとしてゐるが之はまだ甚だ解決困難な問題である。なぜならばフォーピンジャからも有柄石斧が見られ、しかも長頭の頭骨が共に出土してゐるからである。パット氏の筆法をもつてすれば、長頭の人種が有柄石斧を分布させたのではないかと云はれ得る。新石器時代の印度支那には長頭と短頭二種の人種が住み、兩者とも有柄石斧を使用してゐたのではなからうか。吾人は印度支那及び周圍の石器時代の遺蹟がますます今後精密に調査され有史前の人種移動を明かにせんことを切に望むものである。(松本信廣)

Marcel Cohen, Instructions d'enquête
linguistique, (Institute d'ethnologie,
1928)

Questionnaire linguistique, 2 tomes, (Institute d'ethnologie, 191, Rue Saint-Jacques, Paris, Ve.)

パリ大学内の Institute d'ethnologie (人種學研究所) では創

立以來マーセル・コーエン氏に託して未開民族の言語を調査する方法を研究員に講じて貰つてゐたが、今回氏はその講義案をまとめ、上記の如き小冊子を發行した。氏はアフリカに於て多年言語採集に従事し、此種の著作に適任此上なく、百廿五頁の小面積内によく言語採集者の心得べきことを網羅してゐる。この「指針」にはそれと同形の言語採集手帳二冊が添へられてゐる。第一冊には比較的採集し易い身體に關する語、動詞、人倫、自然動植物に關する語、代名詞、數詞、形容詞、感嘆詞等二百十九の單語例、廿三の短句例を挙げ、第二冊にはそれより稍こみいつた語、聞きにくい語百八十三、並びに動詞の變化、稍長い話例等を採集する仕組になつてゐる。各冊四聯づゝよりなり、一部落で第一聯を書き滿し終へるとついで第二の部落で次のセリを滿たすといふ風に、かつ各紙正副二枚づゝよりなり、カーボン紙、鉛筆を附し、一聯書き終ると副を皆切取線から破つて後についてゐる封筒紙に包み、パリーの人種學研究所に送付し、萬一の事故に備へ、また同時にその採集した結果がなるべく中心地に集つて、組織的に利用されんことを期してゐる。人種學研究所は此言語採集指針及び採集手帳を廣く殖民地の宣教師、官吏、探險者の心ある者に配布し、もつてフランス殖民地土人の言語を蒐集しその湮滅を防がむと企圖してゐる。吾人は、この方法によつて比較的なほ調査ゆきとどかぬフランス領の印度支那山地の諸部落の言語が急速に採集されんことを切望してやまぬ。それと同時に日本學界が之に習ひ、その領土、ミクロネシア、臺灣等の言語調査を同じ様な方法によつて試みんことを切に期待するものである。もとより此方法も完